

杏林子の《心の紋様》（翻訳）

谷 峰 夫*

《Zhong Zhong Qing Huai 》 by Xing Linzi (Translation)

Mineo Tani*

I tried to translate 35 parts of 《Zhong zhong Qing huai 》 into Japanese here.

Key Words (キーワード)

Xing Linzi (杏林子), Christianity (キリスト教), The Holy Bible (聖書),
Emotivity (情緒性), Eternal life (永遠の生命)

杏林子は長年その肉体を類リウマチ性関節炎という難病に侵されながら旺盛な創作活動続ける女流作家である。台湾及び香港にあって最もよく読まれている作家の一人だが、その強靱な生命力、研ぎ澄まされた感性、人生に対する真摯な態度、瑞瑞しい筆致、これらすべてが読者を魅了せずにはおかず、彼女の人気を支えている。杏林子を語る時、キリスト教の存在を無視できないが、彼女の場合はキリスト教に近付いたと言うよりもキリスト教の方から彼女に近付いたと表現するのが適切ではないかと思われる節が多分にあり、そこに特異性を見る思いがする。杏林子は生きとし生けるものに細やかな愛情を注ぎ、この宇宙を一つの生命体として賛歌する。愚行や蛮風が世を覆い、命が粗末に扱われ、精神の背骨が大きくずれ曲がっている人類社会であるが、彼女はこの対極に位置する偉人である。しかも気負いというものが全くなく、あくまでも自然体であって、求道という点においても苦行僧のようなところがない。彼女の天才的な直観がそれを不必要としているのである。

今回は杏林子の作品集《種種情懷》（《心の紋様》）を取り上げ、日本語訳を試みることにする。この作品集には46編の散文が収められているが日

本語訳は紙幅の関係でその中の35編についてのものである。

〔1〕蘇 る

「蘇」という字ほど好きなものはない。

道が行き詰まると進退に窮するも、パッと前途に明かりが射し、死地に活路が開けたりする。どっぷりと夢に浸かっていたたびたび起こすも醒めることがなかったのが、突如大智を授かり、悟りを得て霊的なまでに知が研ぎ澄まされたりする。大旱魃も極まれば春雷の突然の轟きとともに恵みの雨を普く受け、万物はこれにより息を吹き返す。さながら枯れ木の如き心で失意のどん底にある時、何かの拍子にハッとして生が潤うことがある。

まさに死の脅威があるがために生の喜びを追求することを我々は知っている。まさに妬みの恐ろしさがあるがために愛と思いやりが必要になってくる。人生にはさまざまな十全でない点、足らざるところがあるが、まさにこのために我々は絶えず自己を乗り越え、つくりあげ、高めようとするし、その上いろいろ気付いたことや得たものを通して生命の一再ならぬ変相に満足を感じ、喜びをそこに求めるのである。

*海上保安大学校 (Maritime Safety Academy)
呉大学非常勤講師

暮らしぶりがあまりに順調であり幸せな人というのよって「蘇」という字の真の意味が体得しにくいものである。

〔2〕笑顔で人を迎える

ほほえみであなたの命に向き合いなさい、他人の命に向き合いなさい。

鏡に向かってどれほど人を喜ばせる顔になっているかを自分に見せる練習をなさい。眉をしかめてはいけません、顔を曇らせてはいけません。嵐を呼ぶ空のようであってはなりません。

気分というのは最も他人に影響するものだということを忘れてはいけません。荒々しい気性、無理を押し通そうとする行為、粗暴な言葉、そのどれをとっても一種の「公害」なのであり、他人の心を汚してしまいます。それ故、あなた自身の不快な気持ちを他人に移してはいけません。あなた自身の重荷を他人の肩に乗せようとしてははいけません。この世の苦難はもうすでに十分すぎるくらい多いわけですから。

できるだけ笑顔で外出しなさい。できるだけ周囲の空気をなごませ、はずませ、楽しいものにしなさい。荷は分担すれば楽であり、楽しみは分かち合うことで倍増することを知らねばなりません。

楽しげに笑うところには愛があり、温かみがあります。

〔3〕試み

これまで口にしたことのない料理を前にした時あなたは味見してみますか、それとも箸をつけるのをやめておきますか？

これまで通ったことのない小道を前にした時あなたは歩いてみますか、それとも引き返しますか？

これまでに経験のないことに対してもしかするとあなたには試してみる勇気がないかも知れませんが、それは恐れ、つまり「未知数」なるものへの恐れがあなたをそうさせているのです。

恐れというものにより、否そう言うのが妥当でなければ、ただ単にあなたの雄々しい心や好奇心が生活の中で年を重ねるうちに磨り減ってしまっ

たがために、あなたは自分に杵をはめ、自分を勝手知ったる世界から一歩も踏み出さぬようにしているのです。それであなた自身の環境に満足し、永遠に波のない人生に満足しているのです。

しかし、あなたが敢えて試みようとしなくて美味しい食べ物、景勝地を訪ねる楽しみ、天地を飛び回る自由といったものがあなたから多く逃げていってしまうのです。

安定も幸福の一種かも知れません。ただ、あなたが人生という旅を終える時、やや悔いを残すことになりはしませんでしょうか？あなたは命というものがどれだけ分かっているというのでしょうか？あなたは世界をどれだけ認識しているというのでしょうか？

〔4〕生命を探検する

私達一つ一つの生命はそれ自体が一個の宇宙を成しており、計り知れぬ奥行きと深さをもっている。

自分に意志力がどれくらいあるのか、能力はどの程度備わっているのか、潜在的な力は如何程か、持久力はどこまであるのか、どれも永遠に分かりはしない。

学ぶこと、使うこと、命懸けで投げ出すこと、愛すること、許すこと、力を発揮すること等いずれもどこまでなし得るかはそれを試みようとしないう限り分かりはしない。

生命は正しく探検の世界であり、それだけに好奇心と挑戦心が満ち溢れていて然る可きだ。模索、探究、努力、克服が絶えることなく続く。もちろんその過程でスリルを味わったり、刺激を受けたり、艱難辛苦を嘗めたり、探りを入れたり、血と汗のほとばしりを見たり、困った邪魔が入ったりといったことを数多く経験することになる。しかし、絶えざる発見が喜びを、絶えざる収穫が満足感をもたらすし、不断に会得することで成長が、不断に練磨することで意志力がもたらされる。そして、常に新しき道に踏み出し、新たな境地に身を置くことで自分自身の生命はその領域と深さを広げることになるのである。

〔5〕 苦しい目に遭う

人は皆苦しい目に遭うことを一種の災い、痛手、損失とっていて、実際はそれが一種の獲得であり、命の再生をもたらすものだという事に気付いていない。

暮らしがあまりに順調であると自分を大したものだと思い込んだり、したい放題であったりするし、あまりに裕福な生活をしていると奢り高ぶりやつまらぬ見栄に走ってしまう。わずかな曲折も少しの障害もなき生命というのは人を自己満足の世界に溺れやすくさせるし、今あるを乗り越え精進するすべをなくしてしまう。それは生命の休止であって死を意味する。

苦しい目に遭うと痛みが心を覆う時があるが、これが却って私達を刺激して知恵を研ぎ澄まし、心をすっきり目覚めさせてくれる。そして、苦しみが去ってそれを振り返ってみる時、私達の内的世界は陶冶され、行いは正しいものとなり、自己と天と人の間には程好い調和がつくれるのである。これは一種の進歩であり、一種の成長である。

私達が苦しい目に遭うのは自然の法則に反することをしたり、酒色に耽ったりすることが原因となる場合がある。また、暴飲暴食をして胃腸を壊したり、体を損ねることによる場合もある。このように大道を捨て危なく険しい道を選べば問題が生じる確率は必然的に上がるのである。自然の法則を守らなければこの機に天から警告が発せられ、目覚めを促して無知蒙昧によるこれ以上の傷口の広がりを防ぐという作用が働くわけである。

私達は過ちを犯せばそれが故意であると否とを問わず最後には必ず過ちがもたらすところのものを受ける羽目になる。一種の教え戒めというものに縛られる形になったり、天による懲らしめを受けたりするのだが、このことは目覚めを促し、直ちに改心させようとしてのことである。困って苦しい目に遭うことは往々にして知らず知らずのうちに生命の中のあまたある未だ見えざる障害、困却の因子を取り除くことになり、私達が英知に富み分別のきく人間になるよう手助けしてくれているのである。

時として何の原因もなく苦しい目に遭うこともあるが、これは単に天が人の心を錬磨するためだったりする。絶えざる挫折は私達の生命を弾力性と忍耐力あるものに鍛えてくれるし、打ち続く痛手は私達の生命をたくましく強靱なものに育んでくれる。また、みぞおちからの流血は私達がかかると他人の痛みを自分のものとし、もっと人の心に近寄り、もっとやさしく大地を抱き締めるよう教えてくれている。

正に苦しい目に遭うことで私達は人間の有限性を思い知り、天に対して敬虔で厳かな気持ちを、生命に対しては尊び愛おしむ気持ちを多く抱くのである。小さな苦しみからは小さな知恵を、大きな苦しみからは大きな知恵をとるように私達の生命は恩恵を受けることになる。

〔6〕 道

私達は物寂しい荒れた道を歩むのが大方のようである。

孤独と疲労。あがきながらの前進。汗が、涙が、そして血が流れ落ちる。無性に立ち止まりたく、横になってしまいたい。疲れはひどくなり、休みたい欲求はいよいよ募る。

しかし、それはままならぬ。これは自分の道であり、他人に代わってもらうことはできない。必ず最後まで自分で歩き通さねばならぬ。あとどれくらい歩かねばならないのかは分からないし、この先どれくらい辛抱できるかも定かではない。ただ一步一步進むのみである。前進すれば一筋の生存の望みがまだあるかも知れないが、それをやめれば救いのない前途が待ち受けているばかりだ。

私達は来し方を振り返ることにすら臆病である。そうすることで足を前に踏み出す勇気がしぼんでしまうのを恐れているのである。

そうして歩みを続けたある日、自分でも知らぬ間に最大の難所はとうに通り過ぎてしまっていることに突然気付くのだ。だが、どのようにして困難を切り抜けてきたかは信じようとしなないし、知りもしない。疲れ切って辛酸を嘗めてはいるものの心は喜びに躍っており、これまでとは全く違う

新しい境地についに足を踏み入れた自分をそこに認めるのである。

〔7〕新しい朝

新しい日がやって来ること、それは一つの奇跡であり、生命の蘇生である。

深い眠りから目覚めた我が身に暖かく降り注ぐ太陽の光。胸は新たな高ぶりで波打ち、血液は勢いよく体中を巡り、細胞は生き生きと活動を始める。新しい日の挑戦を前に元気は百倍、顔全体に生気がみなぎるのを覚える。

天秤棒を担ぎ道を急ぐ人はその荷を下ろして初めて完全な休息を得ることができるが、私達は大抵の場合肩に明日の愁い悩みをずっしりと載せ、それと同時に未だ見ぬ明日の恐怖や不安をも先取りして背負い込み、そうして一生を終えることになる。忙しくせっせと働き、心が落ちつくことがない。しかし、如何にして自分の重い荷を神に託すかを知っているならあなたは必ずや神から生命力を引き出すことができよう。

毎回の休息も新たな出発のためにあるに過ぎない。今夜は暫し疲れ切った心と足を休ませることにしよう。明日の朝になれば太陽はまた昇るのだから。

〔8〕試 練

ある年上の人のこと。その人は私に会う度に人生訓をひとくさり垂れるとともに決まったように強調して次のように仰しゃったものです。「あなたの心がたくましくなきゃね、信念がないとね！」私はそう言われていつもちょっと笑みを浮かべるだけでした。

ある年のこと、その人はアレルギー性鼻炎にかかってしまわれました。ところが長い期間治らないものですからずっとそれを悩んでおられ、私に会うとその苦しみを切切と訴えなさるのです。私はその人に「心がたくましくなきゃね、信念がないとね！」と言いたかったのですが、とうとう口にしませんでした。信念は行動という実践と一体であってスローガンではありません。

夫婦の愛は貧しさの中でこそ分かるというもの。友情の真価は苦難の中でこそ分かるというもの。軍人の勇ましさは危険の中でこそ分かるというもの。

一人の人間の清らかさや品性、道徳、修養の程度を知ろうとするなら、その人が試練、重圧、痛手を受けた際どのように身を処し、如何なる態度を取るかを観察することです。

〔9〕生命を教える授業

子供に医者や弁護士、あるいは企業家や政治家になることを期待してはいけない。このように粹をはめるのはよくない。何となれば、どの職業に就くかはさして重要なことではなくて、大切なのは子供が生命を如何に認識し、体で分かるかということなのだから。

子供達には責任感のある人間、つまり、自分に責任を負うということが分かり、他人に責任を負うということも分かる人間になるよう教え導かねばならない。

と同時に、子供達には楽しい人間であるよう教え導くことも必要である。今の世代は楽しさとは何かがもう次第に分からなくなってきていて、大はしゃぎしたり、遊び回ってふざけ合うことだと思いついてはいるがそうではない。真の楽しさとは、一種の心安らぎ満ち足りた素朴で落ちついた静かな境地に求められるものなのである。

子供達は前者から如何に生命を尊重するかを教わり、後者からは如何に生命を享受するかを教わるのであり、この二つが分かることによってその一生を自ずと豊かで幅のあるものにすることができるのである。

〔10〕成長の歩み

子供を過保護にするのは禁物である。

成長して独り立ちするように導くことが必要で、そのためには心を鬼にして子供を突き放さねばならないこともある。情け容赦のない雨風に耐え、ぬかるみの苦境を乗り越えること、拒絶や辱めを受け、足らざるに苦しめられること、これらは子

供に体験させてみることだ。痛手や涙、それに過ちのために払った代価はすべてひ弱な生命をより強靱なものにしてくれるし、これまで以上に耐える勇気を与えてくれる。と同時に、挫折やしくじりの中から自分の歩みを知り、それを調整することに力があり、包容ということを学び、他人を受け入れるための助けとなってくれる。その結果もっと広い度量が形成され、万物に慈愛を注ぎ、自分を大切にすることが分かるようになる。

それ故、子供が苦しい目に遭うのを良からぬことと思うのはいけない。子供が傷つくのを心配してはならない。子供にはいつでも帰って来て涙を流し、傷がいやせる場を与えさえすればよいのである。

〔11〕一年の終わり

一年の最後の日に向き合う時ある種の淡い悲哀感が胸をよぎるのではなからうか。と言うのも時は少しの情け容赦もなく足早に通り過ぎてゆくからである。私達が時を楽しみ、時を掌中に収めたことが未だかつてないかのように時はあつと言う間もないスピードで一年を駆け抜けてしまう。

この一年はよかったと思うにしろ、嫌だったと思うにしろ、最早消え去って永遠に引き返しはしない。そして楽しかったことも悲しみ憂えたことも時が移るにつれて次第に記憶の彼方に埋もれてしまう。

一日また一日と、そして一年また一年と、子供はすくすく成長し、青年は勢いよく伸びてゆく。そうして壮年には下り坂が、老年には衰えによる死が待ち受けているのだが、生命の歩みにこの間停止というものはない。私達はもっと英知に富む人間になることができるし、その逆に益々頑なで愚かな人間にもなれる。また、もっと円熟した人間になることができるし、その逆に益々抜け目のない我利我利の人間にもなれる。さらには豊かな収穫を得る人間になることができるし、何一つ得るもののない虚しい人間にもなれる。

日は昇り、そして落ちる。花は咲き、そして散る。月は満ち、そして欠ける。斯く繰り返される

自然の摂理の中で、そこに如何なる意義と価値を注入するか、それと自己に背き、神に背くか否かで私達はどちらの人間になるかが決まってしまうのである。

〔12〕痕 跡

今年に入って艶と潤いのある頬に小皺ができ出した。

美容の専門家によれば、顔に皺を作らない最良の方法は笑わないことだそうだ。もちろん泣くことも怒ることも悼み悲しむことも避けなければならぬし、心が高ぶることはそれにもましていけないのだそうだ。と言うのもこれらの表情はみな顔面の筋肉や神経を使うわけで、それにより皺ができるからだとのことである。

問題は人間が感情の動物だということにある。感情を捨て去ることができない以上、愛や憎しみ、喜び怒りから超然とはしてはいられない。これらは内に発し、外に現れるのであって、もともとこれほど自然なものはないのである。然るにもし自分を抑えて笑うべき時に屈託なく笑うことができず、涙を流すべき時にぐっとこらえるというのでは元来顔にできる皺が心の中にまでできるのをひたすら心配しているとしか言いようがない。生命の中の反応する部分や感じとる部分を捨て去り、それによって完全で疵のない抜け殻を残したところでそれが何になると言うのであろうか。

〔13〕人と歳月

人は歳月に必ずしも打ち負かされるわけではない。

月は満ち、そして欠ける。花は咲き、そして散る。雲は寄り集まり、そして離れゆく。この自然のリズムが繰り返される中で人の失うものがある。それは額の張りであり、唇の赤い艶であり、黒髪のしなやかさであり、筋肉や皮膚の弾力性であり、背筋の伸びであり、歩みの力強さである。さらには、知らず知らずに精力も失われ、一読しただけで立ち所に記憶する能力も減退する。もっと言うなら、雄々しさ、素早い反応力、周囲の事物に対

する好奇心、困難を克服する勇気、草地に寝転んで夢を見る権利等もその中に入れてよいかも知れない。ただ、多くの人の場合、これらを喪失してしまうのは年若くしてであるが…。

ところで、失うものあれば逆に得るものもある。白髪が多くなれば知恵が増すし、世の中を見尽した両目から輝きが消えても人情の機微はよく分かるようになる。心臓の鼓動は弱くなっても気宇や度量の方は広くなり、記憶力に陰りが見えても知識の方は随分と豊かになる。速戦即決の気力はなくなってもそれと引き換えに客観的に分析したり、冷静に考慮を払ったりすることができるようになり、100%の勝算をはじくことができるようになる。たとえ山水に遊ばなくとも山水は自分の心中にあるという風になる。時が足早に過ぎ去る中で、人はとげとげした苛立つ性格や派手で衝動的な個性を洗い落とし、穏やかで丸みがあり、英知に富む自己へと変身する。そして平穩無事こそ幸せの根源だという理を悟るのである。

最終的に歳月は人の生命に打ち勝ちはあるが、人が人生の途上で置き残して来た楽しい語らいや笑いの声、尽きせぬ祝福や愛情といったものの前に勝ち目はない。

〔14〕書の森に足を踏み入れる

静まり返った夜、書籍の詰まった部屋に一人で足を踏み入れるあの瞬間が何ともたまらない。

書籍の世界はまるで森のよう。奥深くうっそうとした空間。小川のせせらぎの音に、鳥たちのさえずり。天を突かんばかりの珍しい松の木や柏の古木。地を覆う可愛い草花。にぎわいもあれば、ぽっかり空いた静けさもある。はつらつとした生氣が存するかと思えば、倦み疲れたような閑寂も存する。

大自然の知識を学ぶにしろ、森の新鮮な空気を吸うにしろ、或るいは何もなさずにただこの奥深い空間の静けさを楽しむためだけでもいい、ここに身を置けば書の森は人の心を完全に解き放し、伸び伸びしたものにしてしてくれる。

〔15〕静けさ

文机に書を広げるも読んで中断する。

静けさが書を読むのを中断させるのである。静けさ——これには足があるようで、こちらの知らぬ間に忍び寄って来て私を取り囲む。こちらは手を伸ばしてそれをつかまえたくなるが、驚かせるのもなんだからそっとしておくのである。

落ちついた静けさの中、そのやさしい眼差しが明かりの下で私に黙って付き添っていてくれるのを切に感じてしまう。

〔16〕待 っ

何かを待っているようでいて何を待っているかが分からないということがある。

ぼんやりした気分、ドキドキする心、何故か知れぬ不安、そういったものないまぜの状態がそこにはある。起こってくれること、到来することを待ち望みながら一方で現実にならぬことを恐れる心理が働いている。そして時間はこういった漠たる期待と苛立ちの中を音もなく擦り抜けてゆくのである。

〔17〕幻

夜もだいぶ更けた。

帰って行った友人が先程まで座っていた椅子を眺めていて些かぼんやりした気分になる。本当に友人がたった今まで来ていたのだろうかという思いにとらわれる。あのやさしく情熱的な眼差し、舌鋒鋭く飛び交う談論、部屋中を満たす爽やかな笑いと言らい——そういった中に居れば命の底からこみ上げてくる熱きものを感じることができる。だが、突然にして人は帰ってしまいひっそりとなる。そこには元のままの夜と元のままの明かりがあるだけですべては無に帰し、まるで何もなかったかのようなのである。友人が本当に来たのかどうかということや本当にこのような友人と知り合いであるということさえもおかしなことにはっきり言えないようなのである。

人間の諸々の感覚もただの幻覚に過ぎないのかも知れないということだろうか。自分自身にして

からがこの大いなる時間と空間における一つの幻でしかないのであろうか。いわゆる永久不変とは何を指すのであろう。また、愛し愛されたいいろいろな生命体はどこに行ってしまったのだろう。かつて多くのものを所有していたようでもあるし、これまで何も所有することがなかったようでもある。

しばらくの間、明かりの下でこのような思いをしきりに巡らすのであった。

〔18〕両 極

山の静けさは好きだが、そこに棲息する虫はどうも苦手だ。

都会の便利さは気に入ってもそのにぎわい喧噪は嫌いだ。

バラを愛するならその棘を受け入れなければならぬ。臭豆腐（チョウドウフ）が好物なら吐き気を催させるにおいに我慢しなければならぬ。生あるを喜んでその死に向き合うこともせねばならぬ。何故かように愛には多くの如何ともしがたいものが常に存するのであろうか。

愛と憎しみをすっぱり切り離し、その境目をはっきりさせるというのは難しいもので、丸ごと受け入れるか、それとも丸ごと捨て去るかするものである。多くの場合、人生にはほとんど何ら選択というものがなく、矛盾し対立するものに調整を加え、それらを大きく包み込むことを学び、その上でバランスを取っているに過ぎないのである。

〔19〕流れる泉

読書をしている時、原稿を書いている時、或るいは仕事で多忙を極めている時、はっと自分に驚くことがある。何と歌を歌っている自分がそこにいるからだ。頭の中には歌のことなど少しもないのにどういふわけか知らぬ間に声が出ているのであり、まるで他人が自分の喉を借りて歌っているような感覚がそこにはある。

とりわけ、夜も更け人が寝静まった時に音符が不意に喉笛を滑り出してしまった場合は周りの人を気遣ってすぐさま止めなければならない。

正統な歌い方というものでは全くなく、歌詞もあったり無かったりで、調子はちぐはぐ、大抵音節の数もわずかとといった具合なのである。また、楽しい時にだけ歌が出るわけではなく、おもしろくない時にも同様に歌は出る。それはあたかも体内のある種の成分が集まって泉となり、栓がしっかり閉まっていない時を狙って漏れ出て来る感がある。

〔20〕自己発見に向けて

人里を離れ、どこか辺鄙で静かな場所を探し求め、そこで一人きりになりたいと思うことがよくある。

人もモノもすべて自分の世界の外に置いてきて、何ら邪魔が入らず、干渉も妨げも全くないところで絶対的な静けさと自由を享受し、その中で思想と精神と感性を思い切り解き放ち、のびのびと飛翔させてみたいのである。天地は無限大で、人は命の底からこの宇宙という懐の広い生命体にぶつかってゆくことができるし、そうすることにより自分を裸にして自らの目でそれを見ることが可能になる。裸の自分は見慣れておらず、ばつが悪いし、ぎょっとしてこれがそうだとほとんど信じたくはないものではあるが、自分が想像していたほどには完全でなくともあまりひどくもないわけであり、ここで改めて自己観察が開始されることになって自分という個体に向き合い、それを受け入れようとするのである。

そして孤独とはつまりこのような一種の探索と自己完成の作業だということになる。

〔21〕無 為

木にエメラルド色をした小鳥が一羽いる。朝のうちもっぱらそれを観察する。手元に鳥類図鑑があるわけではなく、何の鳥かは分からない。もともと図鑑があったところでひとつ調べてみようという気も起こらないのだが。

このように時には自分の心を知りて空白のままにしておきたいことがあるものだ。それは鏡のような湖面に映る周囲の景色を突っ込んで探ろうと

はせず、またそれにあれやこれや説明を加えようともせず、ただ映るがままにしておき、その空の光や雲の影から自分というものを見てしまうのにちょうど似ている。

〔22〕自己に新たな生命を吹き込む

創作というのは詰まる所作家の生命の発露であり、展開であり、新たな生命の吹き込みである。

技巧はいとも簡単に学び取れるが、文章にどのような内包性をもたせるかということになるとそれは難しい。そしてこの内包性は作家自身の生命に直接由来するのである。

その生命が陰鬱にして悲観的消極的なものであり、人生に恨みや不満があれば、文章も自ずから難解で物悲しさが全体に漂うものとなる。

過激な観念を有し、度量が狭く、心理的にわだかまりがあれば、筆を執った場合勢いそれは世を憎しみ憤り、ひねくれて片寄りのあるものとなり、傲岸不遜にして荒々しさが満ち満ちたものとなる。

同様にして、思想が貧弱で精神が虚ろであり、周囲の人や物事に全く無関心であるなら、内容があり、感情がこもり、命の輝きとほとばしりの見られる文章がどうして書けようか。

創作というのはこの様に内なるものを見詰め、自己調整し、それを外に発するという形で完成を見るわけで、一編の文章を物す前に先ず自己の生命に意を用いなければならないという過程があることになる。一編ごとの作品の完成は正に作家による生命の新たな吹き込みなのである。

〔23〕いま少し幅のある心で

人は生まれながらにして平等であるけれども自分の都合で階級なるものを多く作り出した。

いわゆる貴族と平民、上流社会の人と下層社会の人、エリートと小市民、といった具合にである。

ところが、自分のために作った階級の落とし穴に気付いてはいない。つまり、財力が往々にして人を眩惑し、知識が人を傲慢にし、権力が人を墮落させるということを知らずにいるのである。

私達に他人を批判する資格があるだろうか。

他人を攻撃する資格があるだろうか。

他人に反対し、他人を差別視する資格があるだろうか。

そのようなことをするのは自分が他人より優れているという思いがあるからではないだろうか。他人より神々しく清らかだという思いがあるからではないだろうか。他人より気高く、聡明にして有能だという思いがあるからではないだろうか。

そうだとしたらそれは間違っている。と言うのは、私達には人品卑しいところもあり、不潔な思想もあるからだ。また、当を得ない行為に出ることもあり、過ちを犯すこともあり、弱々しくめそめそ泣く時もあるからだ。

私達は皆人間であり、誰が誰よりも優れているとか、逆に劣っているとかいうことはないのである。

ともに人間である以上、ともに同じ人間である以上、何故もう少し分かり合い尊重し合うということをししないのか。何故もう少し寛容になり信頼しようとししないのか。

私達は人を愛する時も実は自分を愛しているのである。つまり、他人に投影された自分の縮図を愛しているのだが、この際それからもっと脱皮することが必要なのではなからうか。

〔24〕星降る夜

その一

星と星の間が数万光年隔たっているというのはざらである。では、人と人の間はどうかであろうか。星ほどではないと言えるだろうか。愛し合う者同士一生を通じて遥か隔たったところからしか向き合えないという場合は多い。相手の発する光の信号は目にすることができるし、それとなく伝わる情のこもった相手の胸のうちも分かるのであるが、如何せん天の川に阻まれ、渡るに渡れず、通るに通れないということはいくつもあることだ。

その二

夏の夜空を見上げるとちりばめられたような星が点々としている。そのキラキラ輝くさまは目にできて実際に近付けはしない。それはちょうど

久しく敬服している人が発する光と熱を遠くにいて感受できても近付きになる縁は巡って来ず、遂には心の中で敬慕するだけに終わってしまうようなものである。

〔25〕 霊的なつながり

一冊の好著に出会う。心からの深い感動を覚える。著者の思想が自分とこれほどまで近いことに驚きの気持ちを抱く。

一幅のいい絵に出会う。かねてからそれを知っていたかのような思いがする。その絵が自分の心の中に随分前から存在しているが如き感をもってしまう。

一曲の素晴らしい音楽に出会う。胸の震えを止めることができない。この音楽は自分のためだけに用意されたものではないかとさえ解したくなる。何故こんなにも自分の心が分かっているのであろうかと思ってしまう。

それらは自分の知らないところで作られたものだ。数百年前のものもあるし、数千年前のものだってある。ところが、文字、色彩、音符の中に一種の神秘的な電信コードが飛び交っていて、作品の精神の深部にさっと私達を誘う働きをしてくれるようで、それにより私達は作品の中を流れる血液の躍動感、思想の波打つ様、愛や憎しみ、悲しみや喜びといった心理の諸相に触れることができるのである。

これはちょうど林の中のヒヨドリのようにその姿は見えなくとも鳴き声からその存在を知るようなものである。

遠く離れた友人もまた然り。久しく会ってはおらず、便りでのみ保たれている関係であっても互いを思いやる親密の情が常にあるならそれは身近にいと同然なのである。

〔26〕 電 波

瞳を凝らして遠くを見る。周囲の大気中を無数の電波がしきりに行き交っているがそれを実際目にすることはできず、つかまえることもできない。ある特定の受信装置を通して初めてその神秘の電

波は音声や画面に変わり、伝達しようとする情報を教えてくれるのである。

しかし、なつかしい心象風景にぴったり合う周波数となるとそれはどれなのであろうか。

〔27〕 愛とは受け入れることなり

漢字は世界で最も美しい文字の一つであり、それには不可思議で深遠な哲理を含んでいるものが多い。

例えば、「愛」という字。

この字は「心」と「受」の二字に分解できるところから分かるようにその意味は「心で受け入れる」ということである。

私達は施しを愛だと思い違いすることがある。何故そうではないかと言えば、施しには多分に驕り高ぶりがあってそれが人の自尊心を傷つけるからである。愛というのは慎み深さなのだから。

私達は憐れみを愛だと思ってしまうことがある。そうではない。憐れみには多分に相手を軽んじる気持ちが働いていてそれが反感を招くからである。愛というのはしなやかで和んだもののなのだから。

私達は理解、許容、援助、責任などを愛だと考えることがある。確かに愛はこういったものを包み込んではいる。だがそれも心から相手を受け入れるわけではないのならこれらは依然として愛の一環とはなり得ない。

イエスは私達に「己を愛する如く人を愛せよ」と仰しゃった。この己を愛するように人を愛することができるようになるのはいつの日のことだろうか。人の長所と欠点をともに受け入れ、人の成功と失敗をともに受け入れ、人の喜びと涙をともに受け入れる、そうであってこそ愛というものを真に理解したことになるのである。

〔28〕 愛すべきか否か

私達は愛するという事に恐れを感じる場合がある。あるいは愛すべきか否かでためらう場合がある。

愛ゆえの気掛かりで心が愁いに塞がることは避け難いし、愛を捧げることで心が傷つくことは免

れ難い。愛を捧げても何ら反応がないこともあり、どっぷりと愛につかってしまっただけから抜け出ることができないこともある。また、時には生きるの死ぬの別れるのというところまでゆくことである。そして、愛を仇で返すに至ってはこれ以上人を傷つけるものはあるまい。

それ故に私達は愛する場合、苦痛を受けたり傷ついたりするリスクを冒す覚悟がなければならぬ。自己を堅く閉ざし、何も捧げず何も受け入れず、心が凍って硬直するの任せ、もうどんな悲しみや喜びも感じ取ることができないという場合を別にしてのことだから。

〔29〕 楽しかりし時

愛するという行為は与え手の心に残るものである。なにびともこれを奪い去ることはできず、与え手の生命の一部となって永遠性を得る。

ある日あなたが愛する人に冷めてしまい、愛し甲斐がなくなったと感じたなら、その場合にはそつとさよならを言うか、または何事もなかったかのようにその人から遠ざかるがよい。

張り裂けんばかりの思い、苦痛、失望といったものは心の底に深くしまい込んで時間によるゆるやかな癒しを待つのである。胸の内をとげとげしい言葉で吐露したり、悪意による攻撃に出たり、お互い傷つけあったり、楽しみを共にしたすばらしい時間を台無しにして傷や痛みをいたずらに残し、醜い痕跡を追憶の中に留めるようなことは決してあってはならない。

〔30〕 無情がいいのですか。

もし愛のすばらしさを受け入れることができないとしたら愛が実際には存在しないに等しい。美や幸福といったこの世における他の多くがそう言えると同様に、感じ取る心がないか、若しくは全くの無知であるかならば、この世の一切は空虚で実体無きものと化してしまう。

しかしながら、それが空虚で実体無きものであることを百も承知の上でなおも自らの情について抑えが利かない人がいる。あたかも春蚕が繭を作っ

たり、蛾が飛んで火に入るが如き性である。

それともいっそのこと無情がいいとでもいうのだろうか。だが、その無情とて情であることに変わりはなく、捨てようとして捨て切れない一種の情なのである。

〔31〕 大きくなる

私達が愛しているのはただの幻に過ぎないということがある。

その人の中に敬慕や崇拝の対象としてのアイドルとそっくり同じものを見てしまったり、容貌や振舞にある種えもいわれぬ趣や味わいを認めたり、あるいはただどこでもなく人を魅惑する雰囲気があるとかで心の抑えがきかなくなり愛に走るということがある。

ところが実際は相手のことをあまりはっきり分からず、愛する感覚を愛しているに過ぎないのであり、その感覚の中に自分を深く陥らせてしまっているわけである。

そして自分の愛がそんなにもつかみどころがないものであることに気付く日が突然やって来て愕然とする。だが、その時点で心の痛手は避けようもなく、注ぎ込んだものはこれすべて幻で正に空虚な華やかさそのものでしかなかったことを知り、後の祭りとなる。

この際誰を恨むべきかは分からない。ただ、細心の注意を払って自分の傷口をかばい、ゆっくり時間をかけて治してゆく待つという過程が大切になり、この中で人は成長をみるのである。

〔32〕 板挟み

文章を書く人なら誰もが知っているが、一編の文章をよくするためには削除し割愛するということを心得なければならない。筋道の立っていない無用な文、主題とは全く無関係なむだ言葉、前後と釣合の取れぬ段落といったものは刀を振るうようにぱっさと削除し、全体を簡潔にする——そうしてこそ文章は整然としたものとなるのである。

このことを道理として分かっている人は多い。だが、実際どれほどの人に自分の文章をきれいに

切り揃える決心が迷うことなくできるのかということである。削除し割愛すべき部分を本人が惜しむばかりか、他人が一字二字いじくっただけでも気に入らず、その箇所を庇おうとするからである。

この世における愛情もまた然り。愛情面でも本筋から外れたものは多いわけで、愛しても相手から愛されないとか、許されぬ愛に走ってしまうとか、双方愛し合うもこの世では結ばれないとか——このように種々の困難や障害が立ち塞がってその結果もつれてすっきりしない形になるものがある。この場合、快刀乱麻を断つ式で向かえばきれいさっぱりすることが分かっているが、何ら為すことができぬままついには收拾を難しくさせてしまっていると言える。

本当に割愛するということは難しいし、割愛しないということもこれまた難しいものである。

〔33〕愛 情

その一

人は親近の情を表す時その相手を尊重しているが、これは自分自身を尊重していることにもつながる。

愛というものにうそ偽りの情がないか、一時的な興味から来る場合に見られる欺きと戯れの気持ちがありはしないかを私達は見極める必要がある。

愛というのは責任を伴うものであるが、この種の責任とは親近の情への真心とそれを尊重する意思に外ならない。

その二

真の愛情というのは淫らな情ではないし、激しい情でもない。

真の愛情というのは、人が精神面で次第に成熟して愛に責任が伴うことをよく理解し、愛から健康的で明るい喜びを得ることに力を貸すものである。

そして愛の進行過程で互いに刺激し合い、励まし合い、絶えずともに成長するための助けとなってくれるものでもある。このように愛は略奪ではなく、獲得という性質を有するものだと言える。この種の獲得は精神面における成熟を内包し、知

識や気質それに人生観まで蔵するものであり、人に楽しく、安らかで、穏やかな心の状態をもたらすことができる。

その三

多くの女性は往々にして相手の身分、地位、個人的背景、財力を配偶者選びの条件とするが、この種条件付きの愛情というのは真のものだろうか。

考えねばならないことは万一これらの条件が途中で抜け落ちた場合でも愛情が存続するのかということである。

悲しむべきは人がもし度を越して物質的名利を追い求めるならば愛の本質に傷がつき、純真なる愛を受け付けることができなくなるという点である。

もっとも愛には条件がつきものだ。だが、それは相手の家柄がどうであるかなどにこだわるものではなく、二人の個性がかみ合うか、好みが合うか、知的レベルが近いのか、心が通じ合うか、といった類いのものである。

ところで、どんなに愛し合っている二人であっても結婚後絶えず協調し、順応してゆく努力は必要である。結婚生活は我々に人間関係で風通しをよくし、調和をとり、自分を適応させる方法を最も直接的に教えてくれるものである。

結婚は人を思想的精神的に成熟させてくれるが、その原因はこういったところにもあると言えよう。

〔34〕自 滅

私達は愛に傷ついた時、自分をかたくなに閉ざしてしまうか、もしくはもう一つの対処法として思い切り気ままに振る舞うことで踏みにじられ辱められた心を癒そうとする。

自分を閉ざしてしまうにしろ、気ままに振る舞うにしろ、私達はそうすることを復しゅうだと思っている。この世界の冷酷で無情なさまに対し、この世への満たされぬ思いに対し復しゅうしていると思っている。そして、自分をその中に置くうちに復しゅうの向かうべき先が本当は自分自身だということにはじめて気付くわけである。

実のところ、この種の傷を癒すことができる唯

一の方法と言え、それは再度愛を受け入れることであり、再度愛を与えることなのである。

〔35〕愛情と友情

愛情はあらゆる感情の中で最もすり減りやすいものである。

愛情には独り占めしたい気持ちや一途さが極めて強烈に作用するもので、絶対に他者を受け入れようとはしないところがある。愛の濃密度が増すにつれお互いを隔てる隙間は狭まり、その結果、摩擦は多くなるし、絶えざる要求や欲求が働く中で愛に満たされぬ場合の当事者を敏感で疑い深くしてしまう。多くの行き違いや溝はここから生まれ、それによって完全なる愛が破綻する羽目になる。

友人というのは平行線上にあって進退可能な一定の距離を有し、伸縮可能な一定の空間を有するものである。進退可能かつ伸縮可能であることから、そこには互いに尊重し、遠慮し合い、自分を抑えて譲るという心が多く働くことになる。

友人というのは対等な立場であるので、切磋琢磨し、お互い励まし合い、学び合って進歩してゆける。それは水の如き清く淡い関係ではあるがいつまでも続く質のものである。

私は人と友人になる方を選びはしても恋愛関係をもとうとは思わない。恋愛関係が一時的なものであるのに対し、友人としての関係は一生のものとなり得るからである。

—以上—

〔注〕上の〔1〕～〔35〕のそれぞれについて中国語の原題を以下に記しておく。

- | | |
|------------|------------|
| 〔1〕 蘇 | 〔2〕 笑靨迎人 |
| 〔3〕 嘗試 | 〔4〕 向生命探險 |
| 〔5〕 受苦 | 〔6〕 路 |
| 〔7〕 新朝 | 〔8〕 試煉 |
| 〔9〕 生命的功課 | 〔10〕 成長歷程 |
| 〔11〕 年終 | 〔12〕 痕跡 |
| 〔13〕 和歲月較量 | 〔14〕 走入書叢 |
| 〔15〕 靜 | 〔16〕 等待 |
| 〔17〕 幻 | 〔18〕 兩極 |
| 〔19〕 流泉 | 〔20〕 走向自己 |
| 〔21〕 無為 | 〔22〕 再造自己 |
| 〔23〕 加多一点点 | 〔24〕 星夜 |
| 〔25〕 靈犀相通 | 〔26〕 電波 |
| 〔27〕 愛是接受 | 〔28〕 該不該愛 |
| 〔29〕 美好時光 | 〔30〕 寧肯無情? |
| 〔31〕 長大 | 〔32〕 兩難 |
| 〔33〕 愛情 | 〔34〕 自殘 |
| 〔35〕 愛情与友情 | |

なお、今回の翻訳で取り上げなかった11編の原題は次の通りである。

- | | |
|--------|--------|
| ◦ 所謂幸福 | ◦ 尽心而已 |
| ◦ 積極生活 | ◦ 那個地方 |
| ◦ 焚日 | ◦ 溫柔 |
| ◦ 自我追求 | ◦ 思念 |
| ◦ 偶然 | ◦ 繭 |
| ◦ 愛的試探 | |

(了)